



黄石公と張良

長谷川雪堤模 文政13年 (1830)
 縦113.4 横44.8cm 『雪旦雪堤
 粉本』289枚のうち
 当館請求記号 リニ-29

司馬遷撰『史記』に記された中国の故事を描いたもの。土橋の上で乗馬の老人（黄石公）が履を落とし、川の中で竜に乗る人物（張良）がそれを拾って捧げる図として描かれている。

この画題は狩野派でも好んで用いられ、探幽（1602-74）の「張良黄石公図」や探信守政（1653-1718）の「黄石公張良図」など、また錦絵においても、鳥居清信（1664-1729）の伝とされる「黄石公」と「張良」図、さらに鈴木春信（1725-70）の「見立黄石公張良」などの作品が残されている。

画者雪堤（1813-82）は、『江戸名所図会』の挿絵を描いた長谷川雪旦（1778-1843）の長男。本図は雪旦が描いたものの雪堤による模写とされる。中国にあっては、模写は古く六朝時代から画技習得の手段としてのみならず、成果物である模本そのものの価値も認められている。中国画の伝統様式を受容して、我国の主流派となった狩野派は、本図のような伝統的テーマや形式を踏襲するために用いた原本を、「絵手本」あるいは「粉本」と呼んで尊んだ。雪旦・雪堤父子も伝統のテーマや技法を継承することにおいては例外ではなかった。